



## 2008年度タフスィール公開研究会開始

イスラームの原点であるクルアーンを理解を深めるためのタフスィール（クルアーン解釈）研究会は、今年度で三年目を迎えます。

今年度も引き続き、クルアーンに興味のある方ならどなたでも参加できる公開研究会という形式をとっています。また、より詳しい解説と質疑応答ができるよう、今年度は回数を8回に増やし、毎回一人の発表者が担当します。

一昨年度は、膨大なクルアーンの中でも特にイスラーム教徒が毎日の礼拝のたびに口にする第一章の開端章とイスラーム教徒の日常生活に関わりの深い規定が多数記述されている第二章の雌牛章を解説しました。そして昨年度は、第三章のイムラーン家章を取り上げました。

今年度は、第四章の婦人章を古典的な解釈書、現代的な解釈書を合わせて読んでいきます。第四章を大きく八つに分け、それぞれの担当が分担し、重要な部分を中心に解説していきます。

今年度第一回研究会は5月24日に行われました。発表者は森伸生・イスラーム研究所長です。参加者は64名でした。ここに発表の概要を報告します。

発表は第四章の婦人章1節から21節までの内容についてです。本章は婦人に関する啓示が多いので、婦人章と名付けられています。この諸節を通して、人間はすべて平等であるというイスラームの見解から、婦人や孤児への敬愛ならびに家族関係上の諸係累者の権利遺産の分配、家庭生活の連帯責任が説かれています。

家庭生活の大切さが強調される以上、婦人の名誉を重んじ、婚姻・財産およびその相続上の諸権利が尊重されます。この女性の権利を保護する原則はすべての状況に適用されることが強調されています。

とくに、ここでは人間の平等性について、第四章一節の解説をあげてみます。

第一節に「われ（神）は一つの魂（ナフス・ワーヒダ）からあなたがたを創り」とあるように、人間は一つの祖から出ています。ナフスはここでは身体と魂を意味している。身体には物質的な四肢があり、魂には精神的・内面的な部分があり、知性、記憶、学習などの感性的な部分もあります。そして、人間の祖の単一性は家族を相互に慈悲、愛情をかけ、協力を行う存在とさせることを意味します。「ナフス・ワーヒダ」（一つの魂）はアードムですが、ここで、ナフスという言葉を使っているのは、男女に関係なく、人間の祖は一つであることを示すためであると解釈されています。また、女性（イブ）が男性（アードム）から創造

され、その後、男性でも女性でも女性から生まれてくるとしたのは、双方共に親しみをもち、愛着を感じ、やさしくする存在となるためであり、また人生において男女が常に協力し合う存在とするためであると考えられています。

また、今回の解説の中には遺産相続についても詳しく説明がなされています。やはり、この問題は古今東西、いつでも社会問題として常にとりあげられているからでしょう。遺産相続の原則は、より多くの遺産継承者に被相続者の富を分与することにより、財産を社会的に出来る限り広範囲に分配しようとするものです。その特徴は次のようになります。

- (1) 被相続者の債務の弁済と遺言における財産分配ののち、残余は相続人によって相続される。相続人との間の不要な争いを回避するため、遺贈には法定相続人を含むことを認めない。



タフスィール研究会風景

- (2) 遺贈による財産の相続は、財産全体の3分の1を限度とする。
- (3) 息子はすべて同等の相続権を有し、息子間の優劣を認めない。
- (4) 娘もすべて同等の相続権を有する。
- (5) 子供は、親の遺産の相続権を常に有する。夫がなくなり、妻が残り、妊娠しているのが明らかになった場合には、財産は出産するまで、分配を停止する。
- (6) 男性は女性以上に財政上の責任を持つために、息子は娘の取り分の二倍を相続する。
- (7) 両親には特別な扱いをすべきであり、したがって子供の遺産の相続権を常に有する。

(8) 妻は、夫の遺産の相続権を常に有する。

(9) 夫は、妻の遺産の相続権を常に有する。

(10) 兄弟、姉妹、おじ、おばは、一部の場合に限り相続権を有する。

(11) 財産分与の不正は大罪である。ハディース「遺言における害は大罪のひとつである」、「男、または女が60歳までアッラーに服従して仕事をしてきた。それから、二人に死が訪れたが、二人は遺言で害をなした。そこで二人は地獄に行くことになる」

他にも、女性の権利など細々とした説明が行われました。

今後の予定は、第2回6月21日（土）、第3回7月26日（土）、第4回10月4日（土）、第5回11月22日（土）、第6回12月20日（土）、第7回2009年1月24日（土）、第8回2月21日（土）となります。皆様のご参加をお待ちしております。

## 平成20年度 第一回 イスラーム研究所講演会開催

## —ムスリムの食文化を考える—

6月7日（土）午後1時半より当研究所主催によるイスラーム講演会が行われた。この講演会は毎年イスラームをシャリーア（イスラーム法）を中心に理解しようと言う趣旨でおこなっていたが、今回はイスラームをより身近なものとして考えると言う視点からこれまでにない方法を試みた。まずテーマを決める時により身近なものとしてイスラームの「食」を選んだ。その時に、話だけではなく実際に体験したらより分かりやすいのではとの提案があり、それができる場所として会場をトルコ料理のレストランにすることが決められた。レストランで講演会をやると言うのは初めてのことでどうなるか想像も出来なかったが、一度やってみるのも面白いと言うことで大学側の援助と参加者の食事代の一部負担をお願いして実現できた。人数は70人ぐらいが入れると言う渋谷の「アンカラ」と言うレストランが引き受けてくれることになり募集の通知を出した。果たしてどれだけの反響があるのか不安だったが幸い67人の参加者があった。レストランもこんなに多くの人が入ったことが無いと言って喜んでくれた。

講演に先立ちレストランのトルコ人シェフからメニューの料理の説明をしてもらい、トルコ料理の豊かさの一端を知らされた。講演は森イスラーム研究所長がイスラーム教徒にとって許されるものと禁じられるものについての話から、預言者ムハンマドのスナ（慣行）にのっとったイスラーム教徒の食事マナーなどを学んだ。講演の後はそれぞれのテーブルを囲んでトルコ料理を楽しみながら和やかな雰囲気の中で話が弾んだ。帰り際には参加者からこういう催しならまた参加してみたいと言う声も多く寄せられた。

以下に講演の内容についての要約を記載しておく。

## 1. ハラルとハラーム

ハラル：イスラーム法上許されているコト、モノ

ハラーム：イスラーム法上禁止されているコト、モノ

イスラーム教徒にとって物事の判断基準がこのハラルとハラームになる。ハラームを避けハラルを求めることが常に要求されているのである。

## 2. 食におけるハラルとハラーム

イスラームにおける食の基本はハラルである。

「信仰する者よ、われがあなたがたに与えた良いものを食べなさい。」（クルアーン2章172節）

ハラームとなるのはクルアーンに記された次のものである。

「かれがあなたがたに、（食べることを）禁じられるものは、死肉、血、豚肉、およびアッラー以外（の名）で供えられたものである。だが故意に違反せず、また法を越えず必要に迫られた場合は罪にはならない。アッラーは寛容にして慈悲深い方であられる。」（2章173節）なお、「必要に迫られた場合」とはそれ以外の食べ物が無いときに禁じられたものも最低限とることが許されるという意味である。また他の節では更に詳しく説明されている。

「あなたがたに禁じられたものは、死肉、（流れる）血、豚肉、アッラー以外の名を唱え（殺され）たもの、絞め殺されたもの、打ち殺されたもの、墜死したもの、角で突き殺されたもの、野獣が食い残したものの、（ただしこの種のものでも）あなたがたがその止めを刺したものは別である。また石壇に犠牲とされたもの、籠で分配されたものである。これらは忌まわしいものである。」（5章3節）肉は人の手によって屠畜されたものが求められる。

鳥獣による狩猟肉はハラル：

人に狩猟用として飼われている鳥や犬がアッラーの御名を唱えて放たれ狩をしたものはハラルとなる。



食事風景

「かれらは何が許されるかに就いて、あなたに問う。言うてやるがいい。『（凡て）善いものはあなたがたに許される。あなたがたがアッラーの教えられた仕方によって訓練した鳥獣があなたがたのために捕えたものを食べなさい。だが獲物に

対して、アッラーの御名を唱えなさい。』」（5章4節）

啓典の民（ユダヤ、キリスト教徒）の食べ物ハラル：

啓典の民はイスラームと同じ一神教の民であることから彼らの屠畜した肉は許される。

「今日（清き）良いものがあなたが

たに許される。啓典を授けられた民の食べ物は、あなたがたに合法であり、あなたがたの食べ物は、かれらにも合法である。」（5章5節）

「だからあなたがたが、もしアッラーの啓示を信じるならば、かれの御名が唱えられたものを食べなさい。」（6章118節）

「あなたがたは、アッラーの御名が唱えられたものを、どうして食べないのか。かれは、あなたがたに禁じられるものを、明示されたではないか。だが、止むを得ない場合は別である。本当に多くの者は、知識もなく気まぐれから（人びとを）迷わす。あなたの主は、反逆者を最もよく知っておられる。」（6章119節）

## 3. 酒（ハムル）の禁止段階

イスラームは飲酒を禁じていることはよく知られているが、最初から禁じられていた訳ではないことがクルアーンを読むと理解できる。

(1)「またナツメヤシやブドウの果実を喫ませて、あなたがたはそれから強い飲物や、良い食料を得る。本当にその中には、理解ある民への一つの印がある。」（16章67節）

ここでは禁酒について触れていない。それよりも酒を肯定的にとらえている感がある。しかし、果実から造る食料の良さについては言っているが、酒についてはその良さなどについてはまったく言っていない。これだけのことで、禁酒を理解できる人は酒を断つたと言われている。

(2)「かれらは酒と、賭矢に就いてあなたに問うであろう。言うてやるがいい。『それらは大きな罪であるが、人間のために（多少の）益もある。だがその罪は、益よりも大である。』」（2章219節）」

この時点で酒を否定的に扱いたしたが、まだ完全に否定していない。そして、次の節でその否定はより強まった。つまり飲酒状態での礼拝の禁止である。

「信仰する者よ、あなたがたが酔った時は、自分の言うことが理解出来るようになるまで、礼拝に近付いてはならない。」（4章43節）

(3)「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。」（5章90節）

この節によって酒は完全に禁じられた。

## 4. 食事の作法

イスラーム教徒が食事をする際にマナーとして勧められることとして預言者ムハンマドのスナ（慣行）から次のことが言われている。

(1) ビスミッラー（アッラーの御名によって）を唱えて食事を始める。  
 (2) 食事はグループで取る。1人分の食事は2人を養う。2人分の食事は4人分に、4人分は8人分になると伝えられている。  
 (3) 右手で食事をする。悪魔は左手で食べると伝えられていることによる。

(4) 3本指（親指、人差し指、中指）を使って食べる。

(5) 座って食事をする。

(6) 自分の皿に乗った分から食べる、隣の皿に手を伸ばさない。

(7) 大皿の場合には自分に近い皿の端から食べる。

(8) 飲料はビンや缶から直接飲まない。預言者は羊に皮袋（キルバ）に入っている水を直接口を当てて飲むことはなかったと伝えられていることによる。

(9) 過食や少食は体を弱めるため嫌われる。適量は胃の3分の1は食べ物に、3分の1は飲み物に、残りの3分の1は空けておく。

(10) 礼拝の時がやって来ても食事が準備されていれば、先に食べ、それから礼拝する。

(11) アッラーへの称賛の言葉「アルハムドリッラー（アッラーに讃えあれ）」で食事を終える。



講義中の森所長

## 世界ハラール評議会理事会報告

イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員長 武藤 英 臣

去る5月9日(金)10日(土)世界ハラール評議会(WHC: World Halal Council)の第二回理事会がマレーシアのクアラルンプールで開催された。2007年11月総会で選出された事務局長及び理事九名全員が出席し、二日間に渡りWHCの方針や施策を協議した。会長のナドラ氏(インドネシア)は急な用事があって欠席した。

出席者は、私を含めた10名の理事全員が顔をそろえた。

今回の理事会は、次の総会(第七回)の日時と場所の決定、前総会で提案があった案件の事務局案準備、会員資格に関する規約案承認が主な議題であった。

前回までの総会でWHC基本憲章と同規約が承認されているので、それらに基づき具体的な実施要綱策定が我々に課された大きな案件であった。また各委員会から上程された実施要綱や基準規約、実施要綱細則についての理事会承認を与えなければならぬので、朝早くから夜遅くまで議論を続けた。

### 今年度総会開催の決定

今年の総会について、中国、イラン、タイ国からそれぞれ年次総会開催要請を理事会は受けていた。その中で最初の要請が今年3月にタイ国中央イスラーム委員会ハラール局(The Central Islamic Committee of Thailand, The Institute for Halal Food Standard of Thailand)からのものであった。そこで、WHC理事会としてタイ中央イスラーム委員会ハラール局長の説明を求めたところ、局長は部下を伴って9日理事会に現れた。当該局長は退役タイ国陸軍中將であり、博士号を持ち国立大学に講座を持つ人物で、Prof. Dr. Somchai Wirunhaphol(ムスリム名:ザイナルアブディーン)と言い、閣僚クラスの国内実力者である。同局長は、タイ国政府が全面的にバックアップし、今年11月に「タイ国際ハラール展示会」と「タイ国際ハラール大会議」をバンコックで開催する。その際、世界ハラール評議会の年次総会を開催して欲しい。タイ国政府が全面的にバックアップするとの説明があった。

これらの説明を受け、理事会で協議した結果、2008年度世界ハラール評議会年次総会を2008年11月19日から23日間にバンコックで開催することに決定した。

中国からも同様な提案があったが、理事会で協議した結果、中国開催は来以降の事案として継続審議検討することになった。

また、クアラルンプールの世界ハラール展示会(MIHAS2008)に出展中のイラン政府ハラール物産公社代表からもWHC年次総会イラン開催要望があったが、突然の申入れであったこともあり、イラン側に正式なオファーを書籍で欲しいと答え、それを待って検討することを約した。

### 世界ハラール評議会の沿革

評議会はインドネシア・ジャカルタで「世界ハラール食品評議会(WHFC) World Halal Foods Council」として1999年創設された。インドネシア・ボゴール農業大学の教授であったProf. Dr. Aisyah Girindraが会長兼議長に就任した。その後、ジャカルタ、クアラルンプールと交互に総会は開催され、第五回年次総会が2005年9月に初めてアジア以外の南アフリカのケープタウンで開催された。この総会時から「世界ハラール評議会WHC(World Halal Council)」と名称を変えて今日に至っている。2006年は開催を予定しながら、開催実行に至らず、紆余曲折を経てようやく2007年11月、マレーシア開催となった。このような状況下、第六回年次総会はWHC執行部と会員間でいろいろな問題で議論が紛糾し、総会場で役員改選動議が緊急上程され、可決され、役員選出選挙に至った。

それ迄は、創設以来WHC会長はインドネシアのDr. Aisyah Girindra女史、副会長はマレーシア・イスラーム開発局出身で米国へ移住したDr. Mohammad Sadekが務めていた。また2004年からは事務局長の辞職に伴い、副会長が事務局長をも兼務して来た。しかしインドネシアのDr. Aisyah女史は定年で大学を退官した代わりに、2007年初頭からProf. Eg. Dr. Mohamad Nadratuzzmanが「インドネシア・イスラーム学者協議会付属食品、医薬品、化粧品検査研究所(LPPOM-MUI)」所長に就任していた。

そして2007年総会の選挙の結果、設立以来の役員が総退陣し現役員が選ばれた。新役員は次に記す通りとなっている。

### WHC役職者名(就任日2007年11月27日);

会長: President of World Halal Council;

Dr. H. Mohamad Nadratuzzman Hosen, 【Indonesia】

Director of LP POM MUI (The Assessment Institute of Food, Drugs and Cosmetics, The Indonesian Council of Ulama, Indonesia; ジャカルタ、インドネシア。

1) 理事、理事会議長;

Ali Chawk Musaleh, 【Australia】

Director, Al-Safaa Group, Australian Halal Food Services,メルボルン、オーストラリア。

2) 事務局長; Secretary General;

Abdul Rahman R.T. Linzag, 【Philippines】

President-CEO, Islamic Da' wah Council of the Philippines, マニラ、フィリピン。

3) 理事;

Dr. Mohamed Samy Abdel-Al, 【Wellington, New Zealand】

Managing Director, New Zealand Islamic Meat Management and N.Z. Islamic Processed Foods management, ウェリントン、ニュージーランド。

ニュージーランド、ウェリントンのニュージーランド・イスラーム食肉・加工食品マネジメントの代表

4) 理事;

Sulaiman Zhang Ruizheng (スレイマン張瑞正) 【Shandong, China】

山東省済南市イスラーム教協会副会長兼事務局長、山東省済南市、中国。

(ハラール認証総代表)

Vice President & Secretary-General, China Shandong Islamic Association, Jinan, Shandong, Peoples Republic of China

5) 理事; シャリーア委員会委員長;

Mohammad Sayeed Navlakhi, 【Johannesburg, South Africa】

Theological Director, South African National Halaal Authority (SANHA),ヨハネスブルグ、南アフリカ。南アフリカ、ヨハネスブルグの南アフリカハラール検査協会(SANHA)の神学部門担当責任者

6) 理事;

Hafez Moorad Booley, 【Johannesburg, South Africa】

South African National Independent Halaal Trust (NIHT), ヨハネスブルグ、南アフリカ。

7) 理事; 総書記;

Abdul Quayyom, 【The Hague, Netherlands】

President, Halal Feed and Food Inspection Authority (HFFIA), ハーグ、オランダ。

オランダ、ハーグのハラール食品・供給検査局

8) 理事、総経理;

Abdul R. Hajir, 【Maryland, U.S.A.】

President/Managing Director, Halal Food Council S.E.A., メリーランド州、米国。

9) 理事; シャリーア委員会委員;

Abdullah Fahim A.Rahman, 【Malaysia】

Director/Halal Consultant, Halal Certification & Consultation, Islamic Food Research Centre (IFRC), Malaysia & Asia Region, Bahtera Lagenda Sdn. Bhd, クアラルンプール、マレーシア。

Director, South East Asia Region, IFANCA International (Islamic Food and Nutrition Council of America), Halal Certification, Bahtera Lagenda Sdn. Bhd, クアラルンプール、マレーシア。

10) 理事、副議長、シャリーア委員会委員;

武藤英臣, Tayeb MUTO, 【Japan】

拓殖大学イスラーム研究所客員教授、シャリーア専門委員会委員長、(宗)日本ムスリム協会理事、



役員集合写真

## 2008年世界ハラールフォーラム (WHF) に参加して

拓殖大学イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員 **遠藤 利夫**

「グローバルなハラール市場開発」をテーマに2008年5月12日～13日の2日間に亘りマレーシアの首都クアラルンプールで開催された「世界ハラールフォーラム (WHF) 2008」にイスラーム研究所から大木と遠藤が参加した。

主催者はマレーシアのKASEHDIA SDN BHD社 (コミュニケーションとコンサルティング会社として1999年設立、(ハラール関係雑誌など刊行)で2006年政府直轄組織として発足したHALAL DEVELOPMENT CORP.(ハラール産業開発公社)のバックアップにより開催された。アジアを始めとする世界40カ国から900を越す政府機関、企業、団体、メディアが参加した。

会場はクアラルンプールの中心にあるKLコンベンションセンター3階で、ツインタワーとしては世界一高いペトロナス・ツイン・タワーを展望できる場所であった。

本フォーラムは2006年に開始され今回が第三回目となる。オープニングはアブドゥラー・マレーシア首相の基調講演から始まり、ハラール産業の現状と展望をメインテーマとする12の発表とパネラーによるディスカッションが行われた。当イスラーム研究所から大木が「日本におけるハラール認証」について発表、遠藤がパネリストとして発言した。併設会場では企業によるハラール関連製品の展示もされていた。

### 【 主要参加国 】

アジア諸国：タイ、インドネシア、ブルネイ、フィリピン、シンガポール、中国、台湾、キルギスタン、トルコ、日本

オセアニア：オーストラリア、ニュージーランド

ヨーロッパ諸国：ボスニアヘルツゴビナ、オランダ、スイス、ベルギー、ポーランド、フランス、英国

アメリカ：米国、ブラジル

中東、アフリカ：アラブ首長国連邦、南アフリカ

政府組織：マレーシア国際商工省、ブルネイ工業資源省農業局、インドネシア農業省、フィリピン科学技術省。中国寧夏回族自治区人民政府、イスラーム商工会議所 (ICCI)

### 【 アブドゥラー首相の講演 】

フォーラム初日に行われた首相の講演の主な内容は以下の通りである。

1. ハラール団地経営者や物流業者に対し、所得税免除、投資税免除、低温倉庫・同業務に必要な機器の輸入税の免除。
2. ハラール関連製品の生産者に対し、投資税額控除、輸出入、特に加工食品、化粧品、パーソナルケア商品、医薬品、ハラール食材、畜産、肉製品の売上に對し所得税免除。
3. HDC (ハラール開発公社) が奨励する業種に携わる業者に対し、外資出資の承認、原材料の輸入関税免除、国際規格の取得費用に対する税控除。
4. 今後3年間に亘り1,500万リンギット (約5億5千万円) の資金をIHI (国際ハラール標準同盟) に提供する。

上記内容からも分かるようにマレーシアが世界ハラール産業のハブを目指す強い姿勢が伺えるものであった。

### 【 フォーラムの発表テーマ 】

今回の政府機関、団体、企業代表による発表テーマは次の通りであった (順不同)。

- ・ハラール基準と産業の発展 (HDC CEO代表)
- ・ハラール市場の動向 (WHF事務局)
- ・マレーシア・ハラールスタンダード (MOSTIマレーシア・科学時術開発省)
- ・ブルネイ・ハラールブランド (ブルネイ工業資源省農業局)
- ・フィリピン・ハラール市場と科学的取り組み (フィリピン科学技術省)
- ・日本におけるハラール認証 (拓大イスラーム研究所)
- ・GCC諸国基準について (GCC基準機構事務局)
- ・ヨーロッパ市場におけるハラール (スイス・IDtrack社長)
- ・ハラール最適化に向けて (Intertek社代表)
- ・中国・寧夏回族自治区におけるハラール産業事例 (自治区政府副議長)

- ・ハラール薬品事例 (マレーシア製薬会社取締役)
- ・イスラーム銀行と発展 (CIMB ISLAM銀行取締役)

### 【 GCC (湾岸アラブ諸国協力会議) のハラール基準 】

上記のうち今後ハラール市場として成長が期待されている中の一つである湾岸諸国 (Gulf States) の基準についての発表概要を紹介する。(注：下記湾岸6ヶ国は1981年5月に地域協力を目的とした湾岸アラブ諸国協力会議、略称GCCを結成している。)

1. GSOとは湾岸諸国基準機構 (Gulf Standardization Organization) の略で次の6ヶ国の代表から構成される。(注：このような共通規則の確立は湾岸諸国協力会議の目的の一つでもある。)
  - (1) サウディアラビア (SASO)
  - (2) クエート (KOWAMD)
  - (3) バハレーン (BSMD)
  - (4) カタール (QGOSM)
  - (5) アラブ首長国連邦 (ESMA)
  - (6) オマーン (DGSM)
2. 役割：
  - ・湾岸諸国間の貿易促進、
  - ・消費者の健康と環境保護、湾岸諸国産業の支援、
  - ・湾岸諸国の関税同盟の要請に対応。
3. 組織：
  - ・理事会は湾岸諸国の商工業大臣により構成。

- ・技術評議会は加盟国政府の基準局長により構成。

### 4. 基準原則：

- ・同意済みの湾岸基準がある場合は自国の基準を新たに設定しない。
- ・湾岸基準により貿易障壁を設けてはならない。
- ・湾岸基準は各国が採用しているもの、または国際基準に準ずるものとする。

### 5. 用語：

- ・ハラールとは、合法的なものまたは許可されたもの。
- ・ハラームとは、非合法的なものまたは禁止されたもの。
- ・GSOはこれらの用語を食品、肉製品、化粧品、パーソナルケア製品、食品の原材料、食品添加物に対してのみ使用する。

### 6. ハラール必要条件：

- ・シャリーア (イスラーム法) において相応しくない原料が含まれていないこと。
- ・製品の準備段階、製造過程、製品の運搬、製品の保管倉庫において使用される道具、機器、装備類はシャリーアの基準を満たしていること。
- ・前記2項の要件に合致しない食品が製品の準備段階、製造過程、製品運搬、保管倉庫でハラール食品に直接接していること。

### 7. 食品包装上のラベル表記について：

- ・次の項目が表示されていること。
  - ① 食品名
  - ② 成分リスト
  - ③ 製造者名
  - ④ 住所
  - ⑤ 製造月日
  - ⑥ 原産国

- ・食品に動物性油脂、肉、ゼラチンなど動物性由来のものが含まれる場合は、動物の種類とその原料がシャリーアで合法とされたものであることを表記しなければならない。
- ・法によって制限されたり、規定により禁止されている名前やシンボルを使用してはならない。

### 8. GSOで制定している対象品の一部を紹介する。

- ・GSO 322/1994 冷凍鶏肉。
- ・GSO 381/1994 食材に使用する乳剤、安定剤、濃縮剤。
- ・GSO 707/1994 食材に使用する香料。
- ・GSO 23/2000 食材に使用する色素。



会議所風景

## MIHAS (マレーシア国際ハラール展示会) 2008に参加して

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

### はじめに

5月7日から同13日まで拓殖大学イスラーム研究所の一員としてマレーシアに出張し、マレーシアで開催された「MIHAS (Malaysia International Halal Showcase : 「マレーシア国際ハラール展示会」) 2008」を視察した後、WHF (World Halal Forum : 「世界ハラール・フォーラム」) に出席しました。ここではMIHAS2008について報告します。MIHASの主催者はMATRADE (Malaysia External Trade Development Corporation : 「マレーシア貿易開発公社」) といいま

す。2004年から始まり、今年は第5回目となります。会場へは宿泊ホテルからシャトルバス、またはタクシーで有料高速道路を利用して移動します。展示会は前日から始まっていました。第二日目の8日も朝から会場周辺は多くの人で賑わっていました。特設会場の外では、飲食を売買する出店が並んでいました。5月上旬のマレーシアとしてはそれほど暑くはなく、過ごしやすい気候だったと思います。例年よりも来場者が多かったと事後報告がありましたが、気候も一因していたのかもしれない。

### MIHAS紹介

今年の「MIHAS2008」は5月7日から同11日まで、マレーシアの首都クアラルンプールにあるMATRADE展示・会議場 (MECC) 敷地内の特設会場で開催されました。同展示会にはマレーシア国内の企業を中心に10カ国以上の国々から、約430社が自社のハラール製品を出展していました。国際展示会ということ意識してか、マレーシア人同士の会話でも、会場内では英語が主として使われていました。マレーシア国外の出展者としては、シンガポール、中国、イラン等が目につきました。また開会中の来場者は約60カ国からの約3万人に達したそうです。来場者の半数以上がASEAN諸国のハラール企業とバイヤーでした。

MIHASはマレーシアで開催されるためか毎年ASEAN諸国からの出展や参加者が多いとのことですが、ASEAN諸国に限った展示会ではありません。世界のハラール市場を視野に入れ、良質なハラール製品を世界中に普及させることが、MIHASの主目的です。このために展示会であると同時に、積極的な商談の場ともなっているのです。

マレーシアはOIC加盟国の中でも現代的発展を遂げた平和的イスラーム国家として世界が目している国家と言えます。こうした特性を生かして、ハラール産業は国策として推進され、国内はもとより、海外にもハラール性の徹底を強くアピールしています。ハラール認証を得、国際的にも高品質と認められる製品を世界中で紹介することによりマレーシアを中心とする国際的なハラール市場の開拓を目指しています。

MIHASは、ハラール製品の紹介と同時に、企業間商談会という面も持ち合わせています。MATRADEは出展企業との商談を希望する世界の企業向けに「MIHAS視察・商談ツアー」も企画・主催していて、売り手と買い手の双方にとってのビジネスチャンスの場と位置づけることもできます。商談会場では事前登録した世界各国のバイヤーが専用デスクにて希望出展メーカーの商品説明を受け、商談をまとめていきます。必要に応じて通訳も同席します。毎年、MIHASでは400人を超えるバイヤーが出展社との商談を行い、期間中に2億リンギット (約70億円) の取引が成立、期間後も継続の商談を含めると総額4億リンギットの取引が行われています。

「MIHAS2008」の熱気から、マレーシアの国教であるイスラームの教えを現代産業と結びつけて世界に発信する、世界的なハラール産業のハブ国になるというマレーシア政府の強い意気込みが伝わってきます。実際、食品・医薬品・化粧品のみならず、イスラーム金融に関しても、マレーシアは世界のリーダーの一角を担っているという自負と実績を持っています。

MIHAS主催者のMATRADEはマレーシア国際通商産業省管轄の同国国際貿易推進機関で、世界の主要都市に海外事務所を置き、マレーシアの製品とサービスの輸出促進事業を担当しています。このことからMATRADEが単なる展示即売会とは異なり、より積極的な国際貿易推進のための場としての機能を持っていることが理解できます。

展示会場の方は、連日大賑わいでした。イスラーム圏、ムスリム消費

者向けには当然のことハラール性を強調していますが、ハラール製品はムスリム以外の人々にとっても良質で安心して消費できるものです。来場者の中には、マレーシア国内はもとより、世界各国からもノン・ムスリムの人々が数多く見受けられました。中には法衣をまとった仏僧もいました。

### 出展内容

展示品の種類は多様でした。飲食料、化粧品、医薬品、調味料、調理油、肉・乳製品、スナック菓子類、健康食品、保存用の冷凍・乾燥果物・野菜、インスタント食品が特に目に付きました。

以下は内訳概要です：

飲食料については約50社が出展していました。マレーシア国外ではシンガポール、中国、イギリスの企業が出展していました。

化粧品については約60社が出展していました。マレーシア国外ではイラン企業が出展していました。

医薬品については約10社が出展していました。

肉・乳製品については約10社が出展。インド、バングラディッシュ、中国、ウクライナの企業も見かけました。

保存用の冷凍・乾燥果物・野菜については約10社が出展していました。ほとんどがマレーシア国外からの出展で、エジプト、パキスタン、イラン、バングラディッシュ、シンガポールの企業が出展していました。

イスラームの教えに則ったその他の出展として、投資、保険や預貯金等金融関連の商品やサービス、ホテルやレストラン、ファーストフード産業、ハラール関連IT産業、食品製造機器・機材、ハラール製品を取り扱うスーパーマーケット、イスラーム関連書籍等がありました。

ファーストフード産業については3社、投資・保険等金融機関については約20社、食品製造機器・機材については5社、スーパーマーケット2店、いずれもマレーシア国内企業の出展でした。取扱商品をカタログを用いて説明し、商品の展示はほとんど見られませんでした。書店については3社、うち2社がマレーシア国内、1社がシンガポールの書店でした。

世界のハラール認証団体やその他イスラーム団体も出展し、それぞれの活動を紹介していました。マレーシアの団体はハラール認証活動よりも、ハラール産業の現状に重点を置いて展示・紹介していました。ボスニアとセルビアのハラール局は、自国の紹介、国内ムスリムの紹介、国内ハラール事情の紹介をしていました。以下が「MIHAS2008」開場で活動紹介していた団体です：

1. マレーシア
  - 1) HDC (Halal Industry Development Corporation : 「ハラール産業開発公社」)
  - 2) IKIM (International Kefahaman Islam Malaysia : 「マレーシア国際イスラーム理解」)
  - 3) KasehDia
  - 4) PPIM (Persatuan Pengguna Islam Malaysia : 「マレーシア統一イスラーム開発局」)
  - 5) YADIM (Yayasan Dakwah Islamiah Malaysia : 「マレーシア・イスラーム布教協会」) 同協会はMIHAS2008の協賛者です。
2. ボスニア
  - ボスニア・ハラール認証局
3. セルビア
  - セルビア・ハラール局
4. パキスタン
  - 国際基準遵守推進協会 (カラチ)
5. フィリピン
  - フィリピン・イスラーム布教評議会 (マニラ)
6. 南アフリカ
  - ケープ・マレー・コンサルタント (ケープタウン)

### おわりに

MIHAS2008の展示会視察を通して、国家が全面的に支援しているハラール産業の力強さが印象的でした。展示会場内では、ハラール製品を取り扱う企業関係者が来場者に熱心に製品説明をする姿勢が、あちらこちらに見られました。国外からのノン・ムスリムの来場者が製品に関心を示すと、英語で丁寧にイスラームの説明もしていました。



展示場内風景

## 第6回諸宗教間対話ドーハ会議に出席して

イスラーム研究所客員教授 徳増 公明

5月13～14日、カタールのドーハで開催されたドーハ諸宗教間対話国際センター（カタール政府機関）主催「第6回諸宗教間対話ドーハ会議」に招待され、出席した。この会議には毎年海外から多数の関係者が招待されるが、今年は30カ国から一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）の宗教指導者、学者達200名が招待された。日本から武藤英臣拓殖大学イスラーム研究所客員教授も招待された。

13日、朝10時からの開会式では、ファイサル・ビン・アブドゥラー・マハムード・ワクフ・イスラーム問題大臣が挨拶。主催者を代表して、イブラーヒム・サーリハ・アル・ナイミ諸宗教間対話ドーハ国際センター長の歓迎の辞。それからユダヤ教、キリスト教、イスラームの各代表者がそれぞれの立場で今回のテーマについてスピーチをした。

つづいてセッションが始まった。

今年の会議の主テーマは「平和と命の尊厳に対する今後の展望—宗教的価値」であった。2日間、朝から夜まで、この主テーマを下記の9テーマに分けて、テーマ毎に3分科会に分かれセッションが同時平行で行なわれた。27名のパネリストがそれぞれ各自の意見を述べた後、参加者との間で熱心な質疑応答があった。

- 1-啓示宗教における平和
- 2-啓示宗教における命の尊厳—自殺と中絶—
- 3-暴力と自己防衛
- 4-世界宗教における平和
- 5-安楽死
- 6-宗教の象徴への冒瀆
- 7-他宗教に対する対応

8-人身売買と臓器売買

9-メディアと暴力

14日の閉会式では今回の会議の総まとめが行なわれ、参加者のコメントも考慮された上、声明文が発表された。その要旨は下記の通り。

会議は平和と命の尊厳に対する展望について、宗教的価値観から話合った。我々はムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒として各自の宗教の理想、価値、実践的な教育について対話をしただけではなく、世界に破壊をもたらし、いろいろな状況下において暴力や不正を生み出している困難で悲惨な問題についても話し合った。中でも特に自殺、中絶、安楽死、神への冒瀆、人身売買、臓器売買、メディアの暴力のような倫理問題について検討した。そして、個人的、社会的責任を果たすため、これらの問題と取り組み、共同の行動をとる方法を模索した。我々は次の点について合意した。

- 1-諸宗教間対話は国際、国、地方等あらゆるレベルが必要である。そのために異なったレベルや規模のワーキング・グループが設立されなければならない。そして、その対話では教育、平和構築、団結、異なった社会や文化の理解を強調する。
- 2-平等、人間の尊厳、人間の自由、寛容、異宗教への敬意、すべての生命への尊厳は実施され、教えられるべきものである。特に若い人たちがこの点について中心的役割を果たすよう、勧めるべきである。
- 3-敬意を払うべき宗教の象徴的なものと神の冒瀆や暴力的諷刺画を並べるなどして、宗教を悪用し、社会の平安を乱すことは大変懸念すべき問題である。我々はすべての宗教や社会に敬意を払う相互理解と行動についての教育を政府や非政府団体が実施することを勧める。

## リヤード訪問報告

イスラーム研究所長 森 伸生

### イスラーム研究会議出席

平成20年2月28日から3月5日にかけてサウジアラビア国リヤードを訪問した。目的は同国のイマーム・ムハンマド・ビン・サウード大学主催のイスラーム研究会議に出席することである。同会議には9カ国から14人の学者が参加していた。会議の場所はイマーム大学の会議場である。

### 開会式

3月1日の開会式には、ナーイフ内務大臣が出席して大々的に行われた。そのために、会場は自動小銃を持った治安部隊の警備員があちらこちらに立って、厳しいチェックを行っていた。会場は700人ほどが出席しており、そのほとんどがサウジ人である。大学関係者、宗教省、イスラーム法研究庁、宗教警察関係者などである。ナーイフ内務大臣は開会の辞の中で同イスラーム研究会議が今後のイスラーム理解に重要な役割を果たすことを望んでいると述べていた。サウジのナンバー3であるナーイフ内務大臣を招いて開会式を行なうなど、イマーム大学の今回の会議に対する意気込みが伺えた。

### 会議初日、2日目

会議初日の3月2日は、午前中にサルマーン・リヤード州知事に海外からの招待出席者が面会に行った。同知事はナーイフ内務大臣の弟である。知事は我ら一人一人を歓迎し、今後のイスラーム研究の重要性を強調し、各国のイスラーム学者の役割に期待していると述べていた。2日の会議は午前の部で8人の研究発表が行なわれ、午後の部で10人が研究発表を行なった。私たちは午後の部から参加して、午後9時半まで同席した。途中1時間ほどの時間をとり、招待研究者とサウジ人研究者との意見交換会が持たれた。その中で、拓殖大学イスラーム研究所の研究活動を紹介し、日本でのイスラーム研究における役割を発表した。3月3日も同様に午前9時～午後7時まで7人の発表が行なわれた。

今回の研究発表はすべてイマーム大学の研究者、宗教省研究者、イスラーム法研究庁研究者ばかりであり、イスラーム研究会議の発表の中

で、特にイスラーム書籍の翻訳の重要性が強調されていた。それは拓大イスラーム研究所の一つの大きな活動にもなっていることであり、その発表に賛同した。さらに、今回の会議を運営したのはイマーム大学宣教師部のサウジアラビア協会であり、そのメンバーになることができた。サウジアラビア協会の事務局長は私の旧来の友人であり、今後もイスラーム研究の活動で必要なことがあったならば協力を惜しまないと言ってくれた。

招待学者の中にはウガンダからのイスラーム大学学長もいた。食事の席などでウガンダの学長はアミン元大統領の話をして、アミン元大統領は実に立派なムスリムの大統領であったと言いつつ、アミン元大統領はニュースでは残酷非道な行動で知られていると言いつつ、彼はすかさず、それこそが西側報道の罠であると主張した。そのようにしてアミン元大統領を追い落としたのであると言った。

タイ南部ファタニーのイスラーム大学の副学長も参加していた。イスラーム大学には中国からもイスラーム学やアラビア語を学びに来ているので、日本からもぜひ留学生を送ってほしいと言う。しかし、現在、ファタニーは過激派が暗躍して危険ではないかと問うと、それはほんの一部のことであり、我々はファタニーの独立などを望んでいない。イスラーム共同体はそれよりもはるかに広大であり、なにもファタニーだけを考える必要など無いと主張していた。

また本学からの留学生にも会い、留学生生活が順調であることを確認することができた。彼が在籍しているサウード大学では、日本語学科も存在するので、日本人に対する理解もあり、手続きなどで日本語教員や日本語学科の学生が手伝ってくれ、とまどうことはあまりなかったようだ。また、サウード大学ではイスラーム教徒以外の学生も受け付けているとのことであるので、日本からの留学者もかなり枠を広げて考えることが出来る。

今回の出張は、三日間であったが、イマーム大学の教員や研究者、招待学者たちとも親しくなり、意見交換をすることができ、有意義な出張となった。

## ハディース入門 (11) – ジャーヒリーヤのアラブ (つづき)

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程 大木博文

前回は、ジャーヒリーヤと呼ばれるイスラーム以前の時代のアラブについて、時代背景や社会・宗教事情を概観した。今回は、当時のアラブ人たちが人の発する言葉を重視する理由や条件、彼らにとっての情報の収集・伝達的重要性と方法を概観し、ある特定の人物に帰される言行を信じ、それを信仰の源泉とみなす思考プロセスと、彼らが拠っていた信頼性の判断基準と情報の選択基準を検討しながら、ムハンマド時代のアラブが彼の言葉を信じることのできた背景を検討していく。

### 情報の非文字媒体

ジャーヒリーヤ時代のアラブは、情報の主要媒体としてのことばを重視していたが、基本的に無文字社会であった。彼らは都市部で男の子が生まれると、砂漠の自然で健康的な環境の下で育て、正則アラビア語を習得させる等の理由で、一時期里子として砂漠の遊牧民に預けた。ムハンマドも幼少時にサード族のハリース、ハリーマ夫妻の許に里子に出されたが、長じても読み書きはできなかった。

文字が発達していないということは、文字を必要とする人や機会が少なかったとも言える。当時のアラブは様々な非言語的表現を付加することによって、文字表記以上の伝達効果を彼らの言葉に含めていた。発話時の速度、音量、音声、抑揚、ストレス効果、リズム感と同時に、身振り手振りといった振り付け、話し手の表情や感情等の他、自然の物音を引用したり真似たり、風の音や木々の振動音、動物の鳴き声や鳥のさえずり等をことばのBGMとして利用したりして、聞き手に対する発話の効果を高めていた。

特に巫女による宣託儀式や魔術師による呪縛式というような神秘的行事の他、結婚式や葬儀といったような場合に、聞き手や聴衆にインパクトを与える情報提供の補助的手段として、太鼓や笛といった楽器による演奏やダンス以外にも、神木や聖石、偶像といった神秘的な表象を多用して言行による情報の効果を高めていた。

### 伝達内容を信じる状況

見聞したある人物の情報を信じる場合の状況は、次のように説明できる。

1. 現状に何らかの不満や不安を抱いている。
2. 自分の所有している情報に満足できていない。
3. 自分自身に利害関係があり、関心・興味・話題性がある。
4. 内容に一貫性がある。
5. 自分にとって斬新性または希少価値がある。
6. 自分の持つ情報や常識に、明確に相違しない。
7. より具体的な情報を知りたいと思う気持ち強い。
8. 何らかの具体的な関連事情や行動が存在する。
9. 内容に品格が認められる。
10. 情報源に好意と権威が認められる。

マッカのような商業都市においては貧富の差が拡大し、一旦砂漠地帯に入れば部族単位で勢力争いに明け暮れる日々の繰り返しの中で、人々は生活をしてきた。情報は自らの命や社会的地位を守るために不可欠であった。少しでも多くの、自分にとって有利な情報を収集しようと人々は躍起になっていた。

### 人物判断の基準

ジャーヒリーヤのアラブでは、人物判断は血統的評価と個人的評価に別けられていた。まず何よりも血統的評価が下される。どの部族に属するのか、その中のどの支族に、そしてどの家族に属するのかによって、人の良い悪しが判断された。優秀な血統に属する者たちの中での個人的な評価の基準は、何よりも経験の豊富さ、つまり年功序列型で年配者は尊敬されるべき対象であった。また勇気と指導力、判断力、統率力という動的側面が第一に重視された。それに加えて誠実、冷静、優雅、温厚、寛大、扶助の精神、感情制御能力といった静的側面が評価された。他部族との闘争に際しては自部族を率いて先頭に立ち自部族のために尽力するといった動的側面が高く評価される一方で、自部族の構成員つまり身内に対しては静的側面の発揚が高く評価された。

またこうした性格が非常時においても変わらず保たれるかどうかでも、人物評価が左右された。通常は富裕で自分が富める時には寛大に振舞っていても、いざ飢饉や旱魃、他部族との戦闘等が起こって我が身に困窮が押し寄せると、即座に保身や財産を守るため吝嗇になるというような者は、信頼を勝ち取ることができなかった。不遇にあって同族の支援を必要としながらも判断力と行動力に秀で、前向きな姿勢を維持し勇敢で誠実な者はそれなりに評価され、人々の信頼を勝ち得ていた。

信頼される人物には、高く評価される個人的性格を過去においてどれだけ積み重ねてきたのか、他人と比べてそれらの性格がどれだけ抜き出ているのかが問われ、個人の潜在能力や状況判断力、適切な顕在化能力といった点が

求められていた。また対人関係における他者理解、信頼関係の構築力、責任感、コミュニケーション能力も他者による評価を高める要因であった。

### 情報伝達の心理と行動

言行内容を正確に第三者に伝達する心理と行動は、次のような状況において高まる。

1. 情報発生源の正しさを絶対視している。
2. それが身近で必要な話題として捉えることができる。
3. その話題に関して、共通の利害関係にある仲間がいる。
4. 集団での具体的な行動を必要とする。
5. 情報の変容が認められないという拘束がある。
6. 伝聞の際に確認が繰り返され得る。

当時のアラブは、こうした心理と行動が養われる状況にあった。

### 情報共有の心理

情報共有の基本的な条件の第一は、情報発信者の心理である。真実をありのままに伝えたい、仲間に認めてもらいたいと同時に感謝されたいという情報発信者一人一人の心理が働くことによって、情報共有の心理が強まってくる。つまりハディースに對し、穆斯林たちの情報共有の心理が作用したことになる。他人が持っている情報を収集したい、自分が持っている情報を伝達したいという心理は、不安と緊張が高じる状況下において特に強く作用する。ムハンマド時代の穆斯林たちの状況が、これに該当する。情報を共有することによって信仰共同体と呼ばれる仲間意識が強まり、良好な信頼関係が構築され、困難や迫害に耐える精神力が育まれることになる。

預言者ムハンマドの言行であるハディースという特定の情報は、イスラーム共同体という特定の集団を形成する個々人が相互に共有することになった。つまりハディースに對し、穆斯林たちの情報共有の心理が作用したことになる。情報共有の心理は、所属する組織の活力とその組織を構成する個人の動機付けに強く左右される。ハディースを共有しようという穆斯林たちの心理は、イスラーム共同体の活力の強さと、イスラームの教えを守り伝えようとする彼らの動機付けが強く作用していたことのものである。

### 情報伝達の方法

ジャーヒリーヤ時代は、一部族が一つの情報伝達ネットワークを形成していた。つまり日常においては部族内での情報収集・交換・伝達が高度・緊密に発達し、部族間のコミュニケーションは軽視されがちであった。部族の単位を越えて交流する機会は、一つには年間4ヶ月と定められた神聖月に各部族の守護神が安置されたマッカのカアバ聖殿への巡礼参拝の時であり、もう一つはマッカの商人たちにとってシリア・イエメン間の交易通商の時だった。前者においてはアラビア半島の情報交換・収集が、また後者においては半島外のそれが行われた。

当時のアラブでは、情報は口コミで伝えられていた。文字がなかったわけではなく、文盲率が高く、文字そのものも発達していなかったため一般に普及してはいなかった。さらに当時のアラビア文字は類似の線を連ねるだけであり、誤記や誤読も多かったため、筆記・筆録・筆伝は好まなかった。

同部族に属する地位の高い尊敬される者が伝える情報は、その部族にとって有益なものであれば、信用され受け入れられていた。各部族単位、または各支族単位、さらにその下部に属する各家単位で常に寄り合いがあり、人々が集まって情報交換する機会は多かった。身内の者同士が通りですれ違えば、その場で何らかの情報伝達が行われていた。有益な情報もあったが、多くはイスラームが禁じた中傷や嫉妬、陰口や自慢話し等のいわゆる無益な雑談で、時としてそうした情報が憎悪を生み出し、部族間闘争の要因ともなっていた。

ハディースの伝達でも、当初は筆伝よりも口伝が重視されていた。また受け入れられる条件として正しいイスラームの信仰が挙げられ、その内容はムスリムにとって有益なものとみなされていたから、ジャーヒリーヤ時代のアラブの慣習に照らしても、ハディースを信用し伝達した最初期穆斯林たちの行動心理を推測することは可能であろう。

### 信仰対象としての情報

情報内容を信じるという行為と、情報内容を信仰の対象にするという行為の間には基本的な相違が存在する。ある人物の言行が信仰の対象になるか否かは、それが一時性のもか不変性のもか、情報源が安定確実と誰もが認めることのできるものかどうかによる。ジャーヒリーヤ時代のアラブの間では詩や宣託、魔術や占いを信じるのが、宗教に結び付くことはなかった。それはそうした言行が、それらが発表、発話、発言された場所と時点で完結というものであり、時空的に特異なものであったことが原因である。一方でハディースの内容は恒常的、普遍的だった。誰でも、いつでも、どこでも認め、信じることのできるものであった。こうしたハディースの時空的普遍性が、信仰の対象としてとらえられることになった要因として指摘することができる。

## ムハンマドとイスラームの誕生(4)

### 6 ムハンマドへの啓示・神の使徒

#### (1) ムハンマドの召命

ムハンマドは結婚後は比較的安定した生活を送っていた。しかし、先に説明したように定住民のメッカ（マッカ）は、商業の町として発展する一方、アラブ古来の美風を失い、一部の大商人たちの専横により、弱者との貧富の差が一層激しくなり色々な社会矛盾が現われていた。そのような状況の中で、ムハンマドは40才になる頃から不思議な夢を見るようになり、一人で思索するのを好むようになり、毎年ラマダーン月（9月）に一ヶ月間メッカの北東約5キロメートルのところにあるヒラー山の洞窟に籠もり瞑想するようになった。

召命があった年のラマダーン月も、ムハンマドはヒラー洞窟に籠もっていた。ムハンマドが40才のときである。突然、大天使ジブリールが現われて神の啓示を伝えた。

ムハンマドは自分が預言者であることを自覚するまでにしばらく時間がかった。初めて啓示が下りたときも、悪霊に取りつかれたのではないかと思ひ、驚きと恐怖で真っ青になり、妻ハディージャのもとに帰っていった。しかし、気丈夫で冷静なハディージャは悪霊などではなく神の靈感であることを信じて疑わなかった。ハディージャは、神は決して彼を悲しませることはしないと彼を慰め、彼女の従兄であるワラカのところへ連れて行った。ワラカはキリスト教徒であり、一神教の知識が豊かであった。彼はムハンマドの話を聞くと、即座に、それは神がモーセに遣わした天使と同じ天使であることを説き、ムハンマドの行く手には預言者としての苦難の道が待っていることを語った。その後も暫くの間は、ムハンマドは啓示があるたびに、恐怖にかられながらハディージャのもとに帰ってきていた。

この時から、ムハンマドの人生は一変するのであった。今までの一世俗人ムハンマドから神の使徒ムハンマドへの転換であった。ムハンマドの意志に関わりなく一方面的な神からの召命であった。

この最初の啓示から暫らくの間、啓示が中断した。啓示が中断した期間は3年間とも6カ月間とも言われている。この啓示が中断している期間、メッカの人々から神に見捨てられたなどと、揶揄されたりもしたが、彼はより一層の精神的修業に専念した。そして啓示は再会し、ムハンマドが63才で死ぬまで23年間、事ある毎に下ってきた。それが後に纏められ一冊の本になったのが現在目にすることのできるクルアーンである。

#### (2) ムハンマドへのメッカ住人の対応

ムハンマドに啓示が下ったという噂がメッカの町のなかに広がっても、メッカの長老たちはさほど気に留めなかった。

最初の頃のムハンマドの説く教えは、アッラーの至高性、唯一性、基本的な社会的道徳だけに止まっていた。

アッラーの唯一性を説くことは、つまり偶像排斥につながるのであるが、初期の教えではその事には触れないでいた。

メッカの中心にあるカアバ神殿はアラビアの多神教・偶像崇拝の宗教的中心地であり、地方からのメッカへの巡礼は商業の基本をなし、メッカ商人の生活の基盤であった。ムハンマドがこの生活の基盤であるカアバ神殿の宗教を壊さなければ、新宗教を唱えても、大商人たちは彼に敵意を抱くことはなかった。

#### (3) 初期の信者たち

ムハンマドを最初に信じた人は最愛の妻ハディージャであった。2番目の信者は従兄のアリーであったされるが、異説があり、解放奴隷のザイド、もしくは後の第一代カリフ、アブー・バクルとも言われている。

ムハンマドは610年から613年の間、特定の人たちを相手に密かに教えを説いていた。彼等の間には、ある程度の一神教の理解がある者たちがいた。ムハンマドはこの一神教の理解を信仰へと高めることに、彼の狙いがあったが、彼の意図はそれに止まらず、唯一神の信仰の体現は社会正義の確立にあることを強調した。

信者が30名を越えた頃、ムハンマドは集会の場として信者の一人アル・アルカムの家を選んだ。アル・アルカムはすでに父親を亡くし、メッカの中心部に家を持っていた。アル・アルカムの家では、ムハンマドは弟子たちと一緒に礼拝したり、教えを説いたりして一日のほとんどを過ごしていた。そのようなアル・アルカムの家の噂を聞き付けて来る者たちもいた。この時期に、信者の数は40名ほどに増えていた。

初期の信者たちは解放奴隷や同盟者などのような弱者層ばかりではなく、クライシュ族の名門の若者達も多かった。彼等はムハンマドの説く、一神教を基本にした社会正義の理想に共鳴したのである。

#### (4) 公然と布教・サファールの丘に立つ

アル・アルカムの家で布教を始めるようになり、次第にイスラームのことがメッカの町でも次第に噂になり始めた頃、次のような啓示が下った。

「あなたが命じられたことを宣揚しなさい。そして多神教徒から遠ざかれ。」(15章-94節)「あなたの近親者に警告しなさい。またあなたに従って信仰する者には、愛の翼を優しく下げてやりなさい。」(26章214・215節)「そして言うてやるがいい。本当に私は公明な警告者である。」(19章89節) 預言者ムハンマドはこの啓示を受けて、外へ出た。彼はサファールの丘に上がり、公然とメッカのクライシュ族の人々に、すべてを超越した唯一神、復活、最後の審判を説き、また、人々に慈善と徳行を勧めた。

ムハンマドが大衆伝道に踏み切ってもクライシュ族の人々は初めのうちはムハンマドの教えを冷笑し、無視し、いぶかしくは思っていたが、取り立てて反対したり非難したり迫害を加えるわけでもなかった。しかし、彼の説教が徐々に神の唯一性だけに止まらず、偶像排斥、とりわけ先祖伝来の慣習の壊滅を叫ぶに至ってはムハンマドに露骨に敵意を示すようになった。

#### (5) 迫害と忍耐

クライシュ族の指導者階級は、偶像を否定されることにより、偶像を納めているカアバ神殿への巡礼が廃止され、経済的基盤を失うのではないかという経済的理由とともに、ムハンマドが青年層の支持を得て次期にメッカの支配権を掌握してしまうのではないかという極めて政治的な不安が強かった。故に、ムハンマドとその仲間に対するクライシュ族の次期支配者層の反発は一層激しかった。彼等の迫害は部族の保護が受けにくい弱小氏族出身のイスラーム教徒や奴隷たちに向けられた。

一時はクライシュ族の支配者層は、ムハンマドに地位や財産を保証する代わりに、彼に活動を止めるように申し出たが、ムハンマドはその申し出を断った。それによって、クライシュ族の支配者階級とムハンマドとの妥協する余地がまったくなくなり、イスラーム教徒への迫害が一層激しくなった。

このようなクライシュ族の迫害の加熱ぶりを見て、ムハンマドはとうとう弟子たちをアビシニア（エチオピア）へ移住させることを決意した。80数名のイスラーム教徒がアビシニアへ移住したと伝えられている。615年のことであった。

## محتويات العدد

1. الدورة الجديدة لدراسات التفسير سورة النساء
2. المحاضرة الإسلامية الأولى لسنة 2008
- رئيس معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
3. مجلس المدراء لمجلس الحلال الدولي
- أستاذ زائر بمعهد دراسات الشريعة : هيدنيومي موتو
4. مؤتمر مجلس الحلال الدولي السابع بماليزيا
- أستاذ زائر معهد دراسات الشريعة : توشينو إندوا
5. معرض الحلال الدولي بماليزيا
- طالب دكتوراه بجامعة ملايا أكاديمية الدراسات الإسلامية : هيروفومي أوكي
6. مؤتمر حوار الأديان السادس بقطر
- أستاذ زائر معهد دراسات الشريعة : كيميكي توكوماسو
7. زيارة مدينة الرياض
- رئيس معهد دراسات الشريعة : نوبوأو موري
8. مدخل الحديث (11) عناصر مقبول الحديث الشريف في العهد الجاهلية
- طالب دكتوراه بجامعة ملايا أكاديمية الدراسات الإسلامية : هيروفومي أوكي
9. السيرة النبوية (4)